

日 時 平成24年5月31日（木）13：30～16：30

会 場 高知県教育センター本館 大研修室

出席者 尾原賢治会長、梅原俊男委員、川村泰夫委員、下司眞由美委員、高月琴委員、田邊裕貴委員、谷脇澄男委員、中村光宏委員、中山美佳委員、中脇正人委員、橋本万里子委員、濱口知恵委員、正木敬造委員  
教育次長（中山）、高等学校課長（藤中）、高等学校課企画監（森本）、高等学校課補佐（小野、竹村）、高等学校課チーフ（竹崎、野田、高野、北村）、高等学校課指導主事（6名）

欠席者 土居英一副会長、竹内信人委員

---

## 1 開会

(1) 教育次長挨拶

(2) 委員交代について

（梅原委員：以下副会長）今春の人事異動に伴う、委員交代について事務局から説明がある。

（事務局）垣内守男委員に代わりに尾原賢治氏を高等学校長協会副会長の立場で委員をお願いしたい。伊藤正孝委員に代わり下司眞由美氏を副校長の立場で委員をお願いしたい。小松泰樹委員に代わり竹内信人氏に市町村教育委員会の立場で委員をお願いしたい。

（委 員）〈確認〉

（副会長）今回から垣内委員に代わり尾原委員、伊藤委員に代わり下司委員、小松委員に代わり竹内委員に検討に加わってもらう。

（新委員）〈あいさつ〉

（副会長）垣内会長が検討委員会委員になったので、新たに会長を選出しなければならぬ。立候補はいないか。

（委 員）なし。

（副会長）推薦はないか。

（谷脇委員）尾原委員を推薦する。理由として、垣内前委員と同じ高等学校長協会副会長の立場であること。中芸高校、高知西高校で教頭職を務め、城山高校、室戸高校で校長職を務め、現在、安芸高校で校長職を務めていること。以上の点からも会長に適任であると判断し推薦する。

（委 員）異議なし。

（副会長）尾原委員に会長をお願いする。

（尾原会長：以下会長）あいさつ

(3) 日程説明、資料確認等

【配付資料】

- ① 次第
- ② 座席表
- ③ 第4回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項
- ④ 県立高等学校再編振興検討委員会委員名簿
- ⑤ 県立高等学校再編振興作業部会委員名簿（案）
- ⑥ 資料1 第4回県立高等学校再編振興作業部会 資料
- ⑦ 第5回県立高等学校再編振興作業部会開催日程調査票

<第4回県立高等学校再編振興検討委員会 資料>

- ⑧ 第4回県立高等学校再編振興検討委員会 資料
- ⑨ 資料2 第4回県立高等学校再編振興検討委員会 資料
- ⑩ 資料3 第4回県立高等学校再編振興検討委員会  
普通科（連携型中高一貫教育校を含む）・総合学科の特徴、現在の再編計画に基づく改編による成果等、課題について
- ⑪ 通学時間調査結果
- ⑫ 県立高等学校再編振興計画策定までの日程（案）

2 第3回県立高等学校再編振興作業部会の内容確認

（会 長）第4回県立高等学校再編振興作業部会を次第に沿って進めていきたい。最初に、前回の作業部会の内容確認を行いたい。事務局から資料1-1の説明をお願いする。

（高等学校課企画監：以下企画監）資料1-1の説明。

（会 長）事務局から説明があった。全体を通して質疑はないか。

（委 員）質疑なし。資料1-1を了承。

3 検討内容

（1）確認事項

- ① 第4回県立高等学校再編振興検討委員会の概要
- ② 産業教育のまとめ
- ③ 定時制・通信制のまとめ

（会 長）確認事項に進みたい。「① 第4回県立高等学校再編振興検討委員会の概要」、「② 産業教育のまとめ」、「③ 定時制・通信制のまとめ」について事務局から説明を願う。

（企画監）資料1-2、1-3、1-4、1-5の説明。

（委員長）質問はないか。

（委 員）質疑なし。資料1-2、1-3、1-4、1-5を了承。

- (会長) 次に、「第4回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項の1 定時制・通信制について」を協議していきたい。
- (委員) 教員の立場からでは、地域の方々が学校に対してどのようなイメージをもっているかは正確には把握していない。
- 高知北高校では、特別な支援を必要とする生徒に対応できる教育というよりも、特別な支援を必要とする生徒にも分かりやすい教育を目指している。どの生徒にも分かりやすい授業に取り組み、「日本一あったかな学校」を目指している。昨年度、生徒対象に行ったアンケート結果から、学校が楽しく感じる理由で一番多かったのは、「分かりやすい授業」であった。教員は、コミュニケーションの場として「友達がいる」とか「先生が話しやすい」などの理由から学校が楽しいのだと思っていた。しかし、「分かりやすい授業が受けられる」ことから学校が楽しいと感じると回答した生徒が飛び抜けて多かった。改めて授業の大切さに気付き、分かりやすい授業を展開することを心掛けている。
- (委員) 中芸高校、高知北高校、大方高校は、多部制単位制の高校である。しかし、大方高校は、従来の全日制、定時制と同じような学校運営をしているため、高知北高校とは少し違った形態をとっていると感じている。今後、大方高校は、多部制単位制高校として高知北高校のように、より多様なニーズに対応できる柔軟な教育システムをもつ学校に変わっていかねばならないと考える。また、柔軟な教育システムに変わることにより、地域のニーズにも応えられると考える。
- (会長) 安芸高校から中芸高校に転校した生徒がいる。その生徒は、中芸高校の校風に馴染み、高校生活を有意義に過ごしている。中芸高校は、東部地域の柔軟な教育システムをもつ学校として、その役割を果たしているが、ここ数年の入学者が少ない状態が続いている。
- (委員) 中学校段階で、不登校や様々な課題をもった生徒や特別な支援を必要とする生徒の進学を考えると、多部制単位制のみならず普通科も選択肢に入ってくる。選択肢を考える場合、一つは場所の問題がある。たとえば、津野町で、多部制単位制の高校を考えた場合、一番近いのは高知北高校である。高知北高校に通学するには1時間30分ぐらいかかる。様々な支援を必要とする生徒にとっては、このような通学時間がネックとなり高知北高校への進学を断念したケースがある。通学面を考慮しなければ、中学側は柔軟なシステムをもつ高校が複数校あることは、中学生の進路選択の上で非常に良いことである。しかし、このような学校の内容の情報が保護者にまだまだ浸透しきれていない。中学校側からも高校の情報を集めていく必要がある。
- (会長) 他県の多部制単位制高校では、自分のライフスタイルに応じて学ぶ時間帯を選んでいく。定時制において、従来の勤労生徒は少なくなっている。中芸高校と大方高校は、全日制と同じ時間帯で学習している。多部制単位制なら午前の時間帯だけ、午後の時間帯だけ、夜間の時間帯だけで良いのではないかと。全日制と同じスタイルで運営するとかえって多部制単位制としての学

校の特色がなくなってしまうのではないか。

(委員) 大方高校の夜間部の生徒の中には、夜間部を第一希望にしている生徒は少ないと感じている。夜間部には、昼間部の授業を選択し受講を希望している生徒がいるが、昼間部が全日制と同じ形態のため受講できない科目もあるとの話があった。多部制単位制のメリットである昼間部の生徒が夜間部の授業を受講でき、夜間部の生徒が昼間部の授業を受講できる点、互いの空いた時間に部活動ができる点、生徒同士の交流が図れる点などの良い点が活かされていないように感じる。多様なニーズをもつ生徒の中には、朝型の生徒もいれば、昼型・夜型の生徒もいる。生徒の様々なライフスタイルに対応できる学校に変われば、学校の特徴がでる。例えば、三部制(学ぶ時間帯が、午前・午後・夜間の3つパターンがある制度)を含めた学校システムに変更をすれば、様々な生徒のニーズに応えられ、また、地域のニーズに応えられる学校になれるのではないかと思う。

(企画監)「資料2 第4回県立高等学校再編振興検討委員会(以下、資料2)」P2の多部制単位制の高等学校入学者選抜における志願倍率(H21~H24)の説明。

(委員) 多部制単位制の昼間部が設置された当時、定時制であると判断し中学生及びその保護者が敬遠していたとの話を聞いたことがある。しかし、今は、全日制と変わらないと判断した中学生は、全日制と同じ感覚で志願先を選んでいる。多部制単位制が全日制と同じシステムをとることにに対しては少し疑問に思う。全日制と同じ昼間部ではなく、定時制の柔軟性をもった昼間部であってほしい。

(会長) 休憩にしたい。

(休憩)

## (2) 協議事項

- ① 普通科(連携型中高一貫教育校を含む)の在り方について
- ② 総合学科の在り方について

(会長) それでは、協議事項の「① 普通科(連携型中高一貫教育校を含む)の在り方について」について事務局から説明を願う。

(企画監)「資料2」「資料3 第4回県立高等学校再編振興検討委員会 普通科(連携型中高一貫教育校を含む)の特徴、現在の再編計画に基づく改編による成果、課題について(以下、資料3)」の説明、及び第4回県立高等学校再編振興検討委員会からの検討依頼事項「2 普通科について」の説明。

(会長) 検討依頼事項「2 普通科について」(1)について意見を聞きたい。

(委員) 保護者の立場からの意見である。保護者が進学先の高校を選ぶとき、高校卒業後の進路を第一に考える。次に、通学方法を含めた経済的状況になる。できれば、自宅から通学できる学校を選択したい。通学時間では、1時間3

0分までは通学範囲と考える。通学の便を考えると、駅に近い高校を選択する傾向がある。保護者間での情報では、第一希望順は、高知追手前高校、高知小津高校、高知丸の内高校、高知西高校の順である。合格できなかった場合は、私立高校を希望している。旧学区外の方々は、無理をしても高知市内校に通学させている。JR沿線の方は、特急で月3万円を支払い通学させている家庭もある。時間的なことを考える人は、下宿をさせている。この場合は最低でも月5万円はかかる。子どもの将来的な選択の幅を広げるためにはある程度の出費は仕方ないと考えている家庭が多い。

(委員) ある程度学力が身に付いている生徒は、県立高校でいえば、高知追手前高校、高知小津高校、高知西高校に進学している。通学に係る費用は経済的にきつけれど地元の高校でなく、高知市の高校に通学させている家庭が多い。進学先を選ぶ場合は、まず進学実績、次に部活動の実績があげられる。教育に対する意識の高い家庭ほど子どものための出費を惜しまない傾向がある。香南市の学力的に優秀な生徒が、地元の高校に進学しても偏差値の高い大学には入学できない現実がある。香南市周辺の家にとっては、通学に関する時間及び経費はある程度仕方ないと考えている。

(委員) 下宿生にとっては、食事管理が心配な点である。下宿によっては食事が付いていないところもある。その場合、食事がコンビニ弁当となり健康面で心配であるとの話がある。このような視点から公的な施設があればよい。

(企画監) 補足をさせてもらいたい。生徒の方で行きたい学校があつて下宿するということもあるが、学校の存在という点で、一定生徒が集まらなると高校の適切な教育ができない場合に、遠くても来てもらいたいということがあつた。学校の存続に関して寮の活用という面でもご意見をいただきたい。

(会長) このことで意見はないか。

(委員) 四万十高校には寮があると思うが、利用率はどうなっているか。

(委員) 四万十高校の寮は、20名定員で16名程度がおり、県外からの生徒も数名入寮している。近年は、中山間地の高校の寮の在り方が変わってきた。かつては地域の中で学校より奥の遠方からの入寮であった。現在は地域外からの入寮になっている。生徒数の確保という点では寮は必要である。寮の運営には年間300~500万がかかる。20人の生徒で一人あたり食費を入れて月3万5千~4万円台の負担である。寮生の数によって運営が左右される。地域外から生徒を集めるとして何人入ってくるかが問題である。寮の運営については、市町村からの援助や県の直営で行うなど、寮生の数が少なくても安定して運営できる方法が必要である。運営見通しが立って初めて地域の学校存続のための寮ということになる。一方、中山間地の高校の存続ということとは逆行するかもしれないが、高知市中心部に寮をつくることも中山間地などから高知市内の学校に進学するためには必要かもしれない。

(会長) 他にこの件について意見はないか。

(委員) 昨年度まで寮のある学校に勤務していた。古い寮では今の生徒の生活を維持できるような環境ではない。前任校では4名1室の定員であったが、こ

れではあんまりということで2名1室にした。このため充足率は50%であった。ただし2時間以上かけて通学する生徒も幡多地域ではかなりいる。この生徒たちは寮に入ることになる。経費は月3万円の寮費と昼代が約1万円で計4万円くらいで、保護者が負担することになる。2～3時間通学にかかることを、近くに寮があれば来やすい学校になる。しかし、24時間生徒を預かるということになると管理の面では学校の負担も大きい。舎官の面でも安心して任せられる人選、雇用があればよいと思う。寮自体の経営に課題はある。

(会長) 他にないようであれば、(2)の「普通科におけるキャリア教育について」に移りたい。専門学科では、職場体験、インターンシップ等取り組まれている。最近の社会構造や雇用形態の変化などもあり、社会に出たがらない、モラトリアム的な若者が増えているということで、普通科においてもキャリア教育や自立を支援する教育が必要であり、その点学校でどのような取組がなされているかということだと思う。また、③のような特別な支援が必要な生徒の支援をどのようにしているのか。

(委員) 勤務校は、この中では③に該当する学校である。特別な支援を必要とする生徒が多い。中学校では手厚い指導ができており、高校ではまだまだとの意見があるが、勤務校では特別な支援の体制づくりを始めている。授業の中で前もって一時間の流れを説明したり、保護者との連絡を密にしたりしている。卒業後の進路を決めなければならないが、この生徒たちが出ていく先で同じような環境があるのか。これだけの指導を要する生徒の将来を考えると心配である。そのため、必要なことは自分でメモ書きをさせたり、自分の不得意なところを自覚させる指導を行っている。

(委員) ③の話が出たが、中学校の場合には、ケースによっては1対1で対応できるようになっている。これによっていろんな力が付いて高校に行ける。ただ、このような対応は高校ではできない。中学校で力を付け、高校に入ってやっていける生徒もいるが、逆に中学校で手をかけすぎたために高校でうまくいかないケースも出てきている。その辺の見極めが難しい。小学校から中学校に入ってくると、小学校の時と劇的に変わる子もいる。手厚い対応で変わる子もいるが、手をかけすぎてもいけないとも感じている。できたら高校でも中学校と同じ対応をと思う反面、その子が社会に出て自立できるのかと考えると、やりすぎてもいけないとも思う。

(委員) 高校から先のことを考えると、高校の先生の判断が難しくなる。だからこそ、その分野の専門性を身に付けた先生も必要ではと思う。

(課長) 委員の指摘は、まさに高校として必要性があることである。高校は一定入試を行って生徒が入ってきているということで、特別な支援を必要とする生徒への個別の対応は難しい。逆にそういう生徒でもわかるような授業や事前の準備などは通常の授業でも可能である。その意味でどういったやり方をするか、苦勞をしている生徒や配慮が必要な生徒全部に合う教育方法が研究されるべきであり、今まさに各校で取り組んでもらっていることである。

特別支援教育学校コーディネーターを愛媛大学の大学院に派遣し、研修をした教員を10校の高校に入れ、学校としてどう対応するか組織的に研究してもらおうということで、今年から5年間かけて実施することにしている。

(委員) 中学校までは手厚いというのがあったが、特別支援学級や学習支援員が付くという点で手厚いということだと思う。中学校では先を見通して、高校でもやっていける力を付けるという目的をもって教育をすることが必要である。高校のキャリア教育の視点としては、自立的生活を営むための生活習慣、対人関係を主とした社会性、職業に就くことを前提とした将来設計をたてる力などを中高を通して一貫して取り組むことが、これらの生徒にとっては大切である。指導の仕方もある、体験的な取組を通してスキルを学ぶことが大切で、これを高等学校のカリキュラムの中にどう位置付けるか。他県では、総合的な学習の時間や学校設定科目等で位置付けているところもある。また、先ほどの3点は課題のある生徒だけでなく、すべての生徒に通ずるキャリア教育ということで、学校全体として取り組むことも必要ではないかと考えている。

(会長) 高大連携について何かないか。

(委員) 高大連携ということだが、中大連携も必要ではないかと思う。中学校2年生の後半ぐらいから、大学での学びや職業について、講演などを行うことで進路選択の一助になると思う。高校生についても、大学の授業を受講することもレベルアップのために必要だが、進路選択という観点での連携も必要だと思う。例えば進路講演であったり、体験話であったり、大学の授業内容や方向性といったようなことを行うことで、1人、2人、10人、20人と進路に対する希望が見えてくるようなアドバイスも高大連携の中ではウエイトが大きい。勉強も大事だが、このような連携もいいのではないかと思う。主体的にということになると、高校生40人を一斉に対応することは難しい面もあるが、生徒に気付かせるということが大切である。個々に対応しないと生徒に気付かせるということは難しい。ある生徒は、初めての80点満点のテストで78点をとった。2点足りないことで、自分のところに話をしに来た。話をしていく中で、生徒が調べる事をはじめ、テストの見直しをするようになった。これも一つのキャリア教育であり、気づきであり、次に失敗しないことの方向性である。個々への対応は難しいという学校の状況はあるが、気付かせていくことで伸びていく。こうしたことを繰り返すこともキャリア教育である。大学との連携も、生徒に興味関心をもたせるためにも中2くらいから行うとよいと思う。

(委員) 主体的なということでは子どもの体験、経験をどう大人が作っていくのが大事である。中2あたりで大学の体験をということだが、長男が高知大学のオープンキャンパスに行く時に中2の子どももついて行ったことがある。大学に足を踏み入れるという経験が中2の子どもへの刺激になったと実感した。大学はどういうところかという意味で、足を踏み入れる機会があればと思う。高校と大学の連携ということで県内の大学へたくさん行ってもらいた

いが、オープンキャンパス以外で高校生が大学を見るチャンスがない。オープンキャンパスは一斉にやるので見るものも限られている。オープンキャンパス以外で大学と連携できることはないのか、学校の先生方に伺いたい。

(学校教育企画担当チーフ) いくつか紹介すると、高知小津高校でスーパーサイエンスハイスクールということで高知工科大や高知大と連携している。その他に県外の大学の研究室に2～3日間入り、大学生と一緒に研究をさせてもらっている。それから、大方高校で自律創造学習といって、地域の活性化を課題とした取組があり、中村高校や高知東高校などが高知大学の人文学部との連携で取り組んでいる。また、そのもとになったクリエイティブシンキングを高知西高校で行っており、生徒のアイデアをどう社会生活に生かすかという取組が行われている。大学以外でも高知丸の内高校が専門学校との連携で専門的で社会に役立つような技能についての講座を受けたりと、各校で連携は広がっているが、それが周囲に伝わっておらず、特に中学生の保護者には不十分である。取り組みは広がっているが、逆に大学の先生が忙しくこれ以上広げられないというところまで広まっているという状況もある。

(高大連携担当指導主事) オープンキャンパス以外で大学との連携はということであるが、国際協力入門という大学の講座に高校生も参加している。先日の1回目は県内から56名の参加があり、室戸高校や檜原高校といった遠方からの参加もあった。これを年間4回行っており、各校にも案内を出している。またクリエイティブシンキングは7月25日頃から1週間かけて高知大学と高知西高校で行い、20～30名の参加がある。また各地域に大学生が入って勉強するような場合には、近隣の高校に案内することもある。2年前は嶺北高校で高校生5名が参加した。

(会長) 普通科でも形は違うが大学の先生を呼んでの授業や大学訪問、体験など連携をかなりしている。将来的には距離の問題もあるのでテレビ会議システムなども利用するという方法もあるのではないかと。他になければ3番目のICTの活用についてどうか。

(委員) 岡豊高校については、いろんな使い方をしている。視聴覚教室もあり、3年生については各教室にテレビが入っていて、教科のDVDを見たり、パソコンとつないで活用している。高校では以前よりも活用するようになってきている。視聴覚教育の研究会もあり、その中で活用方法についても知らせていただいて授業に取り入れることもできる。個人的な意見であるが、小規模校の存続という点では、授業のツールとしてはICTの活用は効果的で、予備校のサテラインなどは補習授業に活用できる。しかし、学校が小さいから授業をテレビ会議で行うということになると、高校の教育の質の保障という点からはフェイストゥフェイスがいいと思う。ある部分ではテレビ会議等の活用があるとしても、学校存続の視点からICTの活用というのは本末転倒であると思う。

(会長) 設問の後半の部分はどのような意味か。

(企画監) 少ない人数でもテレビ会議等を使うことで単位が認定できるのではない



かということの研究もしてはどうかということで、下司委員の言われた教育の質の保障とかフェイストゥフェイスがいいというようなことはこの質問に対する回答になると思う。通信制もあるのでそちらの対応とも関係するが、学校の存在という点でテレビ会議システムで補うことができないかというような意味であった。

- (会長) 他に意見がなければ(4)の普通科高校の特色、他校との差別化ということで意見はないか。
- (委員) 私立と比べて公立は特色に欠ける気がする。私立の場合、創立の理念があってそれに向かってやっている。公立は人事異動もあるが、その学校の理念なりを深く考えて、具体的な目標をたて、それを達成する必要がある。例えば、進学校なら目標の偏差値を恒常的に達成する、部活動なら優勝するとか、管理職と教員が目標を共有し、生徒も一丸となってやっていく。それをしないと変わらない。理念を深く考え、目標を立て、絶対達成していくということをしなければ特色は出ない。学校によっては、サポートを必要とする生徒をしっかりと支援するというのもあるだろう。そういった明確な目標を出してやってほしい。入試についても、可能なら学校独自のものをやるとか、地方の学校が生き残るにしても、例えば、全寮制にして特色を明確に出すというようなことが必要である。
- (会長) 岡豊高校はスポーツが非常に盛んな普通科の学校であるが、学校の基本目標を教えてください。
- (委員) 教育目標でいえば、全ての高校で、今年から学校の教育目標を明確にして、それを教職員が共有している。しっかりその目標に向かって数値目標を達成していこうとどの高校も取り組んでいる。それを図式化して向かっていると思う。それを途中で検証をしなければならぬが、それが始まった年である。岡豊高校は来年で開校30周年になるが、変わらず「礼節を重んじる」が基点である。見て分かるようにということで制服の服装指導が県下一厳しい学校である。そのことが中学校の先生方にもいきわたっている。「礼節を重んじる」というところで挨拶、服装をきちっとすることが評価を得て、就職や進学、特に就職については県内外の企業の方に人数は少ないが評価をして頂いている。それと同時に特色ということでは部活動に大変力を入れている。912名の生徒がいるが、8割の生徒が部活動に入っている。400名を超える生徒が体育系のクラブに入っている。礼節を重んじるなか、どのクラブも優勝を目標に掲げ、県体で優勝しインターハイを目指している。ただ、いつも結果が付いてくるとは限らない。今回の県体では2団体しか優勝しなかったが、たとえ負けたとしてもそこへ向かう姿勢が全ての学校生活の中に生きてくる。文武両道は難しいという話もあるが、そこへ押し上げていこうということで補習にも力を入れている。高知追手前高校、高知小津高校、高知西高校のようになる必要はないということを明確にして、礼節を一番に挙げて部活動に力を入れている。総合型の学校なので体育コースと芸術コースがあり、それぞれの個性の伸長を図っていくということで、このカラーは

29年間変わらないし、30年に向けて教職員がベクトルを合わせている。繰り返しになるが各学校で、それぞれの学校は進学で行くなどのように明確に方向を示してきていると思う。

普通科の特色ということでは、いろいろな進路の選択の幅があることだと思う。キャリア教育の中で中学校2年くらいからどんな大学があるのか、また職業観などを学んでいたとしても、迷いもありながら普通科を選んでいる生徒、保護者も多くいる。そのうえで普通科の中でも進学がメインの所もあるし、進学も就職もどちらにも対応できるというところもあるので特徴をさらに出していく必要がある。普通科の意義が進学だけで、進学でなければ普通科の意味がないというようなことでは決してないと思う。各学校がより特色を出していけばよいと思う。

- (会長) 中学校側から普通科の高校を見たときに、特色がないと感じるか。
- (委員) 各高等学校は本当に特色を打ち出していると感じている。普通科への志願理由は大学進学を目指すものや、3年間で広く学んで進路の選択肢を広げていきたいということで普通科を目指す生徒や保護者が多いと思う。学校の理念とするものや方向は、実際に高校に通う生徒を見るとその高校が分かるので、そのうえで高校を選ぶ生徒もいるし、また、いろいろな悩みを抱えて特別な支援を必要とする生徒が、受け入れ態勢のある高校で学ぶことができるということはとても大きいことだし、進学ではないけれども基礎学力を小規模の学校でしっかりと付けたいという生徒もいるので、様々なタイプの生徒を柔軟に受け入れてくれる高校の体制が整ったらいいと思うのが中学校の思いである。
- (会長) 私の学校も普通科であるが、中高一貫教育校という特色がある。ご承知のように高校の教育課程は3つの大きな柱である教科科目、特別活動、総合的な学習の時間がある。普通科については教科科目ではなかなか差別化することは難しい。あとの特別活動、総合的な学習の時間をどうしていくのかということにもなる。また、中芸高校は定時制の学校だが普通科であるし、そういう差別化もある。普通科といっても全日制もあれば定時制もある。そういったいろいろなシステムがありバラエティに富んでいる。
- (委員) 今、言われたことと少し違うかもしれないが、この検討委員会からの検討依頼ということで、目標をどのように設定すればよいのかということについては、今年から各学校が目標を立てているということなので学校の方向をクリアしていると思う。問題は各学校がしっかり立てた目標を教育現場だけがわかっているのではなくて、保護者と生徒にイメージではなくどうやって正確に伝えていくかが問題であると思う。各学校の努力も必要であるし、県教委の組織として力も必要になると思う。役割分担をはっきりさせ各学校の努力が無にならないような方法をしっかり取ることが必要であると思う。
- (教育次長) 冒頭の挨拶で高知のキャリア教育の話をしたが、その中に先ほど話された学校運営構想図がある。各学校が作っている。固定したものでなく、修正を加えていくものであるが、PTA総会などで校長がこれで説明をするだ

- ろうし、中学校に対してもこれで説明をしていくと思う。PTAの方と一緒にこれを考えていただくことで、ベクトルを合わすことができいくのではないかと思う。小中学校は義務教育なので特色を出しにくいかもしれないが、学校改善プランを作っており、これも保護者や子どもさんたちに示すことによって、地域の学校としての色を出し、このプランを見れば学校が見えてくると思うのでそれをもとに考えていくことが大事であると思う。先ほど、高知北高校では「日本一あったかな学校」づくりという話があったが、そういったキャッチフレーズ、他には、岡豊高校の「岡豊人」、高知西高校の「ハードスピリット」、高知追手前高校の「チーム追手前」といったような言葉が簡単に言えだすとそこの学校の特色が見えてくる。簡単な言葉で保護者や生徒が言えるようなものにする、ひとつの特色付けができるのではないか。
- (会長) 次の検討依頼事項である高知市周辺の高校に志願者が集中する傾向がある。その理由について議論をということだが、どうか。
- (委員) あっさり言わせてもらおうと、地方にいと勉強ができる中学生は高知市の学校に進学すると思う。また、子どもたちに聞くと高知市にはいろんな友達があり、また店もあり、新しい世界、自由を感じているようである。本能的なのかもしれない。名古屋に企業が学校を作って生徒を募集したが、同じように生徒を呼び込むことは高知県では難しい。高知市及びその周辺校に志願者が集まるのは自然の流れである。
- (委員) 子どもの考えもあるが最終的には親の主導もある。その時に、高校を出たときの選択の幅というものがポイントになる。それが大学進学であろうと就職であろうと、子どもにどれだけの可能性を広げさせてあげることができるのかということが親の最終的な判断になる。子どもと親との会話の中でミスマッチのまま進学をしてしまうと、2年後3年後に「ここではなかった。」と言う子どもの声が聞こえてくることもあるので、やはり自然の流れと言うのは大きな要素になると思うが、将来のことを考えた親の意見が子どもとどう話されているのかというところが気になるころではある。
- (委員) (4)の目標の所とも関連するが、高知市以外の学校の状況と高知市周辺とは状況が違うと思う。地元には須崎高校、須崎工業高校、檜原高校の3校がある。例えば、総合学科の須崎高校に進学した生徒の中には大学への進学を目指している生徒、あるいは専門学校や就職を考えている生徒がいる。高校の目標設定の中で、地元の市町村の思いを高等学校側がどのように受け止めているのかも目標設定のポイントになると思う。というのは、子どもたちの人数が減ってきているが、減っていても市町村、そこで生活をしている人はずっとそこにいる。次の人材を育てなければならない。次の世代にバトンタッチをしなければならない。バトンタッチをする立場の者が今の高校生や中学生であるので、人材を育てるといった理念を津野町の保護者に発信していけば、少しでも地元に残る子どもが増えるのではないかと思う。
- (委員) 高知市に人口が集中していることもひとつの理由である。県内の小中学生の約4割が高知市に集中していることもあるので、通学時間や距離、方法、

費用を考えたときに、高知市やその周辺校に限られてくるかと思う。委員がおっしゃったことも要因であると思う。(4)とも関係してくるが昨年11月に開催された「志、土佐学びの日フォーラム」で中高校生の素晴らしい発表を聞いたが、その中で郡部の高校に通う高校生が中学校の時には大規模校で不登校になり悩んでいたが、郡部の高校に進学し小規模校ならではの手厚い指導や地域の方の温かい支援があって、その生徒は自信をつけて、今では大学進学を目指し教師になって自分と同じ立場の子どもを救いたいと生き生きと発表をしたのが印象的だった。そういうことをふまえると、郡部にもきらりと光るような高校ができていくのではないかと思う。県教委の作成した高知ハイスクールガイドを見て、我々も勉強をしているが、中学校が保護者や生徒に高校の特色を十分に伝えきれていない部分もあると思うので、一層力をいれていきたいと思う。

(会長) 連携型中高一貫教育について議論をしていきたい。先ほど事務局から説明があった。中高一貫教育には中等教育学校という一番きついもの、次に私学のような併設型の中高一貫、そして連携の一番ゆるやかな連携型中高一貫教育校が3校ある。連携型中高一貫教育校の必要性や在り方、また、別の地域でこういった連携型の中高一貫が考えられないかという点で意見をいただきたい。

(企画監) 資料3のP3具体的に3校の取組を示している。連携の中学校から何パーセントの生徒が入学しているのか、また、課題を挙げている。参考にしてもらいたい。

(委員) 資料2のP2で平成24年度の四万十高校の自然環境コースで、連携型以外からの生徒の志願者が7名。P3では、四万十高校の自然環境コース入学許可者数7名となっているが、平成24年度は連携中学校からの志願者はいなかったということか。

(再編振興チーフ) P2の7名という志願者数であるが、いわゆる連携型の特別選抜を受験した生徒ではなく、特別選抜以外の生徒が7名志願しているということである。入学者の7名の中には特別選抜を受検した生徒とそうでない生徒を含めた数が7名なので、連携中学から入っていないということではない。

(委員) 以前から自然環境コースへの地元からの進学者が少ないのが気になっている。ただ、23年度に21名となっているが、こういったことが原因か教えてもらいたい。

(会長) 特に23年度が大幅に増えているが、これは何か。

(企画監) 今、志願が増えている理由は分からない。

(会長) 何かのきっかけで増えているのであれば、そういう対策も必要であるという意見がでると思う。調べておいていただきたい。3地域とも努力をされているが、数字で見ると非常に少ない。少子化ということもあろうが、在り方について意見はないか。例えば、総合学科ではあるが、連携という形は室戸高校では将来的にどうか。

- (委員) 室戸高校の室戸市内の中学校からの入学者は50%を切っている。嶺北高校、禰原高校、四万十高校のような連携をすればよいのかと言えば難しいところがあるのではないかと思う。実際に連携中学からの入学者の割合をみると、嶺北高校は60%であるが、他の2校は50%を切っており、今の室戸高校の状況と同じなので、連携型まではいかなくても連携は深めないといけないと思うが、形としてこういうものを目指すのかということについては、まだ考えていないと思う。いかにして室戸市内からの中学生に来てもらえるような高校を作っていくかといけない。
- (会長) 今後こういった連携型にシフトしていけば学校も活性化していくということもあるだろうし、逆に四万十高校は数字的な面だけを見ると、連携をやっているにもかかわらずあまり効果が表れていないように思う。
- (委員) 中高連携型の高校の教員と中学校の教員が連携をしているというのは知っているが、高校生と中学生の生徒同士の交流はどのようにしているのか知りたい。というのは、連携型ではないが中村中高校でピアチューターをやっており、以前かかわったことがあるが、もともとは中学生に高校生が教えるといったことから始まったが、ふたを開けてみると中学校の勉強ももちろん伸びたが、我々の予想をはるかに超えて高校生がものすごく元気になったということ思い出した。今、自尊心といったことが言われているが、自分が年下に勉強を教えて、それが身に付いてくれ、しかも成績が上がったということで自尊心が高まったという事例もあるので、先生同士だけでなく生徒同士の交流も工夫して魅力あるものにしていかなくてはならないと思う。
- (会長) 本校もそうであるが併設型の場合、それがしやすい。始業式などは中1から高3まで同じであるし、本校の場合は中学生と高校生の教室を隣にしている。中学生と高校生が触れ合えるような環境を作っている。連携型の場合は距離があるので教員が移動をして教えているが生徒はどうか。
- (高等学校課指導主事) 部活動や各行事での連携はどの学校もやっている。ピアチューターでは中村高校のいい面があって、今年から高知南中高でも始めたという話を聞いている。中学生が高校生を目の当たりにすることがあって、いいふるまいをする高校生を見ると中学生も影響を受けて、自分の将来を描くことができるという話を聞いている。
- (委員) 嶺北高校、禰原高校と、四万十高校では状況が少し違うと思う。四万十高校の校区は郡部の割に交通の便が良い地域なので、愛媛県の宇和島の高校や窪川高校などに通学することができる。そういう点で状況が違う。
- また、連携をすることで四万十高校の様子が分かる。ここで自分のニーズに合っているか判断ができる。そうした時に選択肢があることが逆に災いしているのではないかと思う。
- (委員) 連携型であるが非常にいいなと思って聞いた。野市中学校で地域の活性化のことをやったが、そこに高校生が入ってくるとその地域は非常に活性化する。今は赤岡中学校が城山高校とやりかけていると思うが、この連携型というのは、ゆるやかな連携が取れそうな感じがあるので、地域によって違

うとは思いますが、これが地域の特色にもなると思うし地域の活性化にもつながると思うのでいいなあと思って聞いた。高知市や大規模校では難しいと思うが、是非こういうことをやっていただいたらいいと思う。

(会 長) 清水ではどうか。幡多でも少し離れており、室戸と似たような地域性があるがどうか。

(企画監) 室戸と清水は似たような地域に位置していると思う。違うところは室戸については、東にまだ東洋町があるということ、清水については清水高校に入学する生徒はほとんどが土佐清水市の中学生で、四万十市、三原村、大月町などからはほとんど来ないという現状がある。

(会 長) まだまだ議論はあると思うが、総合学科については次回に回したい。それでは、本年度のスケジュールについて事務局から説明をお願いしたい

<(3) 本年度のスケジュールについて>

(企画監) 本年度のスケジュールについて説明

(委 員) 確認

<(4) その他> なし

3 閉会

- (1) 閉会挨拶 (課長)
- (2) 次回開催日程の確認
- (3) 諸連絡